

日本の歴史教育は戦争と植民地支配をどう伝えてきたか

——教科書と教育現場から考える——

塩出浩之（京都大学）

日本の歴史教育は、歴史学者の意向を反映した教科書の次元と、社会の動向を反映した教育現場の次元とに区別して捉える必要がある。

第二次世界大戦後、日本史の教科書は政府の検定制度の下におかれ、歴史学者によって執筆されてきた。戦争を経験した世代による過去への反省を強く反映して、この戦争を過ちとして捉える基調が早くから形成され、今日に至っている。ただし戦争に関する記述と比べると、植民地支配に関する記述は乏しい。これは「国史」（ナショナル・ヒストリー）という枠組みが、学校教育における日本史だけでなく、学問としての日本史学をも規定しているためと思われる。

一方、教育現場では、日本史は大学受験のための暗記科目として扱われ、また原始・古代から始まって近現代は駆け足で終わるといった傾向がみられる。その一因は、日本社会において、日本は戦争の被害者だという歴史観が根強く、また日本という国家への「誇り」を求める動きも存在することにあると思われる。戦争や植民地の問題を含む日本近現代史は論争的な領域として回避されがちであり、平和教育がその代わりに担っているのである。

2022年度から高校で始まった科目「歴史総合」は、日本史と世界史の近現代部分を統合し、全ての高校生が学ぶ必修科目であり、以上のような状況を変えることも期待されている。しかし、歴史教育の現場がこの科目をどう受けとめるかは未知数であり、なお様々な課題に直面している。

■塩出浩之（しおで・ひろゆき／SHIODE, Hiroyuki）

1997年、東京大学教養学部学士。1999年、東京大学総合文化研究科地域文化研究専攻修士。

2004年、東京大学総合文化研究科地域文化研究専攻博士課程修了。博士（学術）。

琉球大学法文学部准教授、同教授、京都大学大学院文学研究科准教授を経て、現職は京都大学大学院文学研究科教授。

専門分野は日本近現代史、日本政治史、東アジア国際関係史。

主な著作：

塩出浩之『岡倉天心と大川周明 「アジア」を考えた知識人たち』（山川出版社、2011年）

塩出浩之『越境者の政治史 アジア太平洋における日本人の移民と植民』（名古屋大学出版会、2015年）

塩出浩之編著『公論と交際の東アジア近代』（東京大学出版会、2016年）